ふるさとの昔話

江尾のごぜの森

△今でもあまり人が入らないごぜの森

江尾の東名高速道路の南側に直径20㍍、高さ10㍍ほどの雑木が密生した小山があります。地元の人はここを天狗の住む「ごぜの森」と呼び、今でも近づきません。今回は、この「ごぜの森」にまつわるお話です。

天狗の住む森

昔、京の帝に駿河のごちそうを一足飛びに届けたという天狗が江尾の小さな森に住んでいました。

天狗は夜になると時々怒って、嵐のように木をゆさぶります。朝になって村の人がいってみると、あんなにガサガサゆさぶったのに木の葉は一枚も落ちていませんでした。

また、あるとき村人の一人が、この森で草を刈ってきました。するとその晩、みすぼらしい姿をした坊さんがやってきて、「今日刈った草を森へ返せ、返さないとたたりがあるぞ」といって帰りました。村人は気にもとめずにいると、間もなくその家に病人やけが人が次々に出て、思いがけない不幸が続きました。村人たちは、「あの森のたたりに違いない」とうわさし、以来だれもこの森の草や木に手をつける者はなくなりました。

言い伝えでは、昔、この森にごぜ（盲人で民家の軒先で歌って歩く人）を葬ったから、ごぜの森というのだそうです。

草や木は今でも切らない

△後藤さん

「ごぜの森」の南に住む後藤唯雄さん（82歳）は、「ごぜの森の草や木を切る人は今でもいないよ。子供のころは、うっそうとした暗い森でとても怖いところだった。10歳ぐらいのとき、かくれんぼに夢中になり入ってしまったことがあった。中には大きな石があったよ」と語ってくれました。

地名の由来

桑崎

この村は、鵜無ヶ渕から1㌔ほど北方の集落で、戦国末期、武田氏の遺臣佐藤氏が入植して開拓した村だと伝えられる。

桑崎の語源は明らかではないが、桑の大木があったからか、それとも移住して来た人々が養蚕のために桑を多く栽培したからと考えられる。正月の餅をつかない習慣が残っている。

富士のあゆみ ⑦

曽我兄弟のあだ討ち

◁閑静な曽我寺

曽我兄弟が長い苦労の末、父のあだを討った話は有名です。

それは1193年5月28日のことです。父祐泰が、工藤祐経の手下大見の小藤太と八幡の三郎の二人にやみ討ちになってから18年目のこの夜、曽我兄弟は首尾よく父のかたきを討ちました。

兄の十郎祐成は、仁田四郎忠常に討たれましたが、弟の五郎時致は捕えられてその翌日首を打たれました。伝説ではその場所が、鷹岡だといわれています。

鷹岡地区には、曽我寺、曽我八幡、玉渡神社、首洗い井戸など曽我兄弟に関係した史跡があります。曽我兄弟のお墓は、全国に12ヵ所ほどありますが、お墓と木像のあるのは、曽我寺と小田原市の城前寺だけです。

（文は、郷土史家鈴木富男氏の著書を参考にしています。）

こちら編集室

編集室は今回、うれし涙にむせびました。というのも、いつもは待ちに待っているお便りを、選択に困るほどいただいたからです。音楽が身近になっている証拠でしょうか。没にしてしまった皆さんごめんなさい。

発　行・富士市役所　富士市永田町1丁目100番地☎51－0123
編　集・総務部広報広聴課
人　口　216,448人　男　107,508人　女　108,940人
世帯数　61,354世帯
（11月1日現在）